

SHOW HEY シネマルーム

★★★

ハッピー・フューネラル

(大腕／Big Shot's Funeral)

2001年・中国、アメリカ映画・100分
配給／ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント

2003 (平成15) 年12月10日鑑賞
＜ホクテン座・中国映画特集＞

Data

監督・脚本：馮小剛（フォン・シャオガン）

出演：ドナルド・サザーランド／關之琳（ロザムンド・クワン）
／葛優（グオ・ヨウ）／ポール・マザースキー／英達（イン・ダ）

👁️👁️ みどころ

アメリカの巨匠監督、中国で映画制作中に逝く……。これは大変なニュースだ。しかも彼の「遺言」では中国式の「喜葬」を希望していた……。こんな面白いテーマで中米合作映画が作られ大ヒット。国際関係が緊張している今、こんな楽しい映画が中米友好に役立てば、もっとハッピーだが……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

＜中米合作の面白い企画＞

アメリカ映画の巨匠ドン・タイラー監督（ドナルド・サザーランド）が中国で『ラスト・エンペラー』のリメイク版を製作中、突然倒れ、危篤状態に。そして、タイラー監督の遺言とも言えるべき「喜葬」をあげるため、中国人のカメラマン、ヨーヨー（葛優／グオ・ヨウ）が葬儀委員長として大活躍。それを支えるのは監督助手兼メイク係の美女ルーシー（關之琳／ロザムンド・クワン）。

こんなキャラクターを持った3人の登場人物を軸に、中国流の「喜葬」（ハッピー・フューネラル）をテーマとして面白く描く中国人監督は、馮小剛（フォン・シャオガン）。馮小剛は、日本で有名な張藝謀（チャン・イーモウ）、陳凱歌（チェン・カイコー）監督以上に、中国国民に愛されている監督で、彼の作品は毎年のお正月映画となっており、いわば日本の『男はつらいよ』における山田洋次監督のような存在とのこと。そして、01年中国で公開されたこの『ハッピー・フューネラル』は並いるハリウッド映画を押しつけてNO1ヒットになったとのことだ。

＜テーマは「喜葬」＞

「喜葬」とは聞き馴れない言葉だが、これは中国流のお葬式の考え方の1つ。70歳以

上生きて死亡した人は、その死を悲しむのではなく、「大往生」を遂げたことを祝う。だから「喜葬」というわけだ。

今、ハリウッドの巨匠ドン・タイラー監督は、『ラスト・エンペラー』のリメイク版を撮るため、中国の紫禁城へ来ていた。しかしその撮影はうまくいかず、いき詰まっていた。さらにタイラーはプロデューサーのトニー（ポール・マザースキー）から監督交代をせまられ、疲れきっていた。そんな時、タイラーが聞いたのが中国流の「喜葬」、さあ、タイラーはどうするのか・・・？



<タイラーとヨーヨーとの相性はピッタリ！>

ヨーヨーは、タイラー監督の活動ぶりを記録するため、その24時間の活動をずっとカメラ撮影するべく、監督助手のルーシーに雇われただけの人物。

しかしその撮影技術はしっかりしている。また英語はほとんどしゃべれないものの、ルーシーを介した中国語での話と、片言の英語での「ルーシー発言」は、中国人のモノの見方や考え方をうまく説明しているから、内容タップリで、タイラー監督のフィーリングとピッタリ合った。そのため紫禁城での映画制作に行き詰まったタイラー監督はヨーヨーを重宝し、ヨーヨーから中国での「喜葬」の話聞いて大乗り気。

<タイラーが認めたヨーヨーの実力発揮！>

ある日、自分の身体の異変に気づいたタイラー監督は、自らをカメラの前に置き、ヨーヨーと2人で自分の「喜葬」を挙げてくれと話しかけた。そして、その途中、崩れ落ちるように倒れ込んだ。映画の撮影は既に監督が交代していたから何とかなるものの、世界の巨匠タイラーが映画製作中に倒れ、死亡すれば、これは世界的な大ニュース。

しかも「喜葬にしてくれ」との遺言に沿って、タイラー監督の中国流「喜葬」が紫禁城で挙行されれば、これが一大イベントとなることは確実。ヨーヨーはタイラー監督の遺志の実現を目指し、またヨーヨーの友人ルイス（英達／イン・ダ）はそれによる大儲けを目指し、それぞれに智恵をしばって大奮闘。「喜葬」に必要なタイラーの遺体をはじめとする祭壇その他ありとあらゆる「商品」はすべて競売にかけられ、次々と高額で落札されていた。「葬儀」実行委員長に指名されたヨーヨーの実力がいかんなく発揮されていたわけだ。

<タイラー監督の生死は・・・？>

そんなヨーヨーの実力発揮ぶりを見つめていたのは、死んだはずのタイラー監督。何と

彼は危篤状態から息を吹き返し、病状は快方に向かっていたのだった。彼はルーシーから状況報告を聞き、ヨーヨーが自分の見込み通りの実力を発揮して、自分の「喜葬」が華々しく挙行される様子を楽しげに見つめていた。

＜揺れ動くルーシーのオンナ心と2人の愛の行方は・・・？＞

ルーシーは中国人だがアメリカ育ちだから、アメリカ人的発想が強い。そこでタイラーは、「中国人」を理解するについては、ルーシーよりもヨーヨーの考え方を聞きたがったし、ヨーヨーの説明には十分な説得力があった。

最初は単なる雇い人であったヨーヨーが、次第にその実力を発揮し、意外な顔を見せはじめの中で揺れ動くのがルーシーのオンナ心。当初は意見が対立し、自分のアイデアを説明するにも、いちいちチップを要求していた2人は、次第に・・・。

従って、「喜葬」のために一生懸命働いているヨーヨーに対して、タイラー監督が元気になることを告げられないルーシーの心の重荷も次第に深まっていった。さあ、そんな2人の「愛」の行方はどうなるのだろうか・・・？

＜中米の友好に最適！＞

何とも想像力抜群で奇想天外な面白い映画。そしてそれを支えるのが3人の芸達者な俳優陣。あらかじめストーリーがわかっている、わかなくても十分に楽しむことができる。そしてルーシーを仲介としたタイラーとヨーヨーの対話の中で、アメリカ人の考え方と中国人の考え方の相違点が結構真面目に語られている。

特に、「死」についての中国人の考え方をアメリカ人が真剣に聞こうとする姿勢はすごく評価できる。中国人監督による映画だから、このことは当然かもしれないが、アメリカ人が観ても全然違和感はないだろう。この点『パール・ハーバー』（00年）における日本海軍の描き方の不自然さなどとは全く異なり、実にいい味を出している。

2003年12月9日、アメリカのホワイトハウスを訪問した中国の温家宝首相は、はじめてブッシュ大統領と会談し、台湾問題や北朝鮮の核問題そして米中両国間の貿易不均衡問題などを協議したことが報道された。温家宝首相は、毛沢東、鄧小平、江沢民に続く、中国の革命第4世代として、2002年11月15日中国の国家主席に就任した最高権力者、胡錦濤に続く、中国ナンバー2の実力者だ。

今までアメリカにとって中国は「遠い国」だったし、今でも「未知の国」であることはまちがいない。そして、今後の世界情勢の展開如何によっては、両国の「対立」が生まれ、深まる危険性もある。しかしこんな映画による中米間の文化交流、文明交流を続けていけば、お互いの考え方の一致点と相違点が理解でき、大いにプラスになるはずだ。そういう観点からもこの中米合作映画の価値は非常に大きいものだと私は考えている。

2003（平成15）年12月11日記